

特別史跡加曾利貝塚新博物館(仮称)整備・運営事業 提案概要書

1. コンセプト

「生きている縄文」加曾利貝塚へ人々を迎え入れる
その「ゲート」となる博物館

加曾利貝塚へ人々を誘い、
様々な「循環(サーキュレーション)」を生み出す、
その「はじまり」の役割を新しい博物館が担います



縄文の知を <深める> 場所
認知や交流を <拡げる> 場所
人と人が <結びあう> 場所
この3つを好循環させる
「加曾利式サーキュレーション」により
みらいに向けて成長し続ける施設を目指します

※1.コンセプト及び2.イメージパースは、あくまでも提案段階でのイメージです。

2. イメージパース (位置は3. ②の図中の数字に対応)



賑わいを創出するプロムナード
(小倉台駅側から見たエントランスと飲食・ミュージアムショップ)



土器づくり工房



エントランスホール



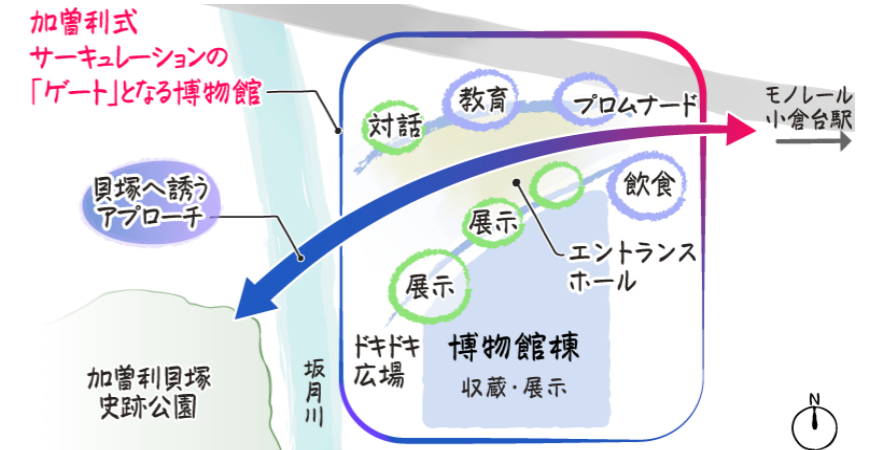
飲食・ミュージアムショップ

3. 配置計画・施設計画

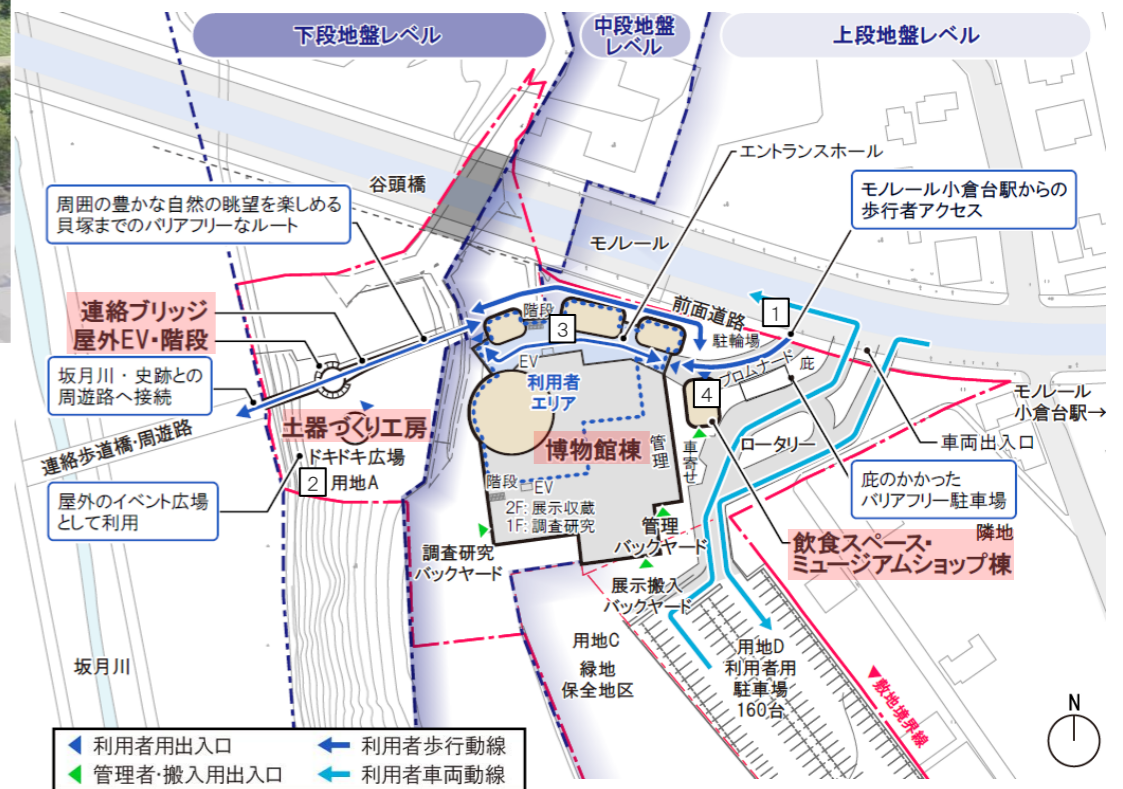
高低差のある既存地形を活かし博物館の機能を拡充する配置計画

敷地内の高低差を跨ぐように博物館棟を配置し、館内と外構での動線整備により異なる
地盤レベルの行き来を可能にし、事業用地の全体活用を実現します。

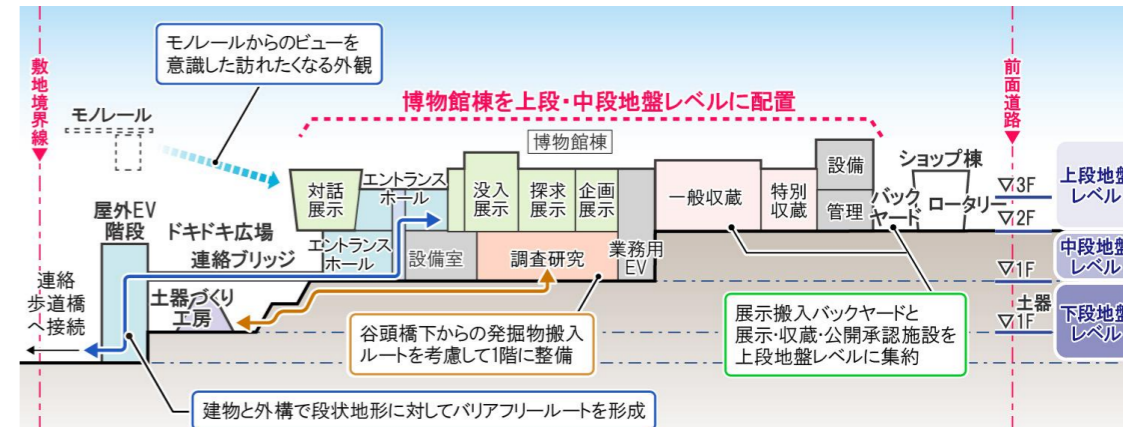
① 駅から加曾利貝塚へ人々を誘因するアプローチを本施設全体で形成



② 事業用地全体の配置・動線・つながり



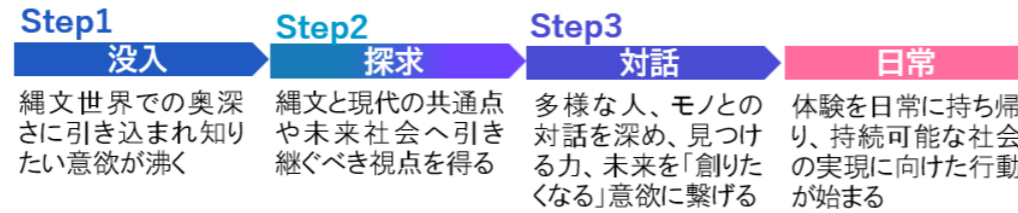
③ 地形を活かした施設整備



※今後、本提案内容から変更する可能性があります。

国内最大級！360度の環状型シアターから縄文の世界へ

- 没入→探究→対話をシームレスにつなぎ、「没入と探究の行き来」による深い学びや、目的や滞在時間に応じて様々な楽しみ方を提供します。
- 没入型展示は**360度の環状型シアター**で縄文の世界観に没入、縄文と現代との行き来（循環）で日常への気づきを生む演出を採用。アナログ・デジタル両方の**等身大の体験**を多数導入して縄文時代へ誘います。
- 探究型展示は、研究者の視点、来館者の視点から縄文を紐解くとともに**日常へのヒント**を加えることで新たな気づきを醸成します。
- 日本・世界に誇る貝塚の博物館として、貴重な実物資料を「**編年ウォール**」など迫力のある展示で構築します。



1. 没入

「かそりウム」環への入り口

縄文人の語るその世界観に包まれ、受動的な見学者から、自分も縄文時代の一員となり、「**生きている縄文の環へと足を踏み入れる。**」

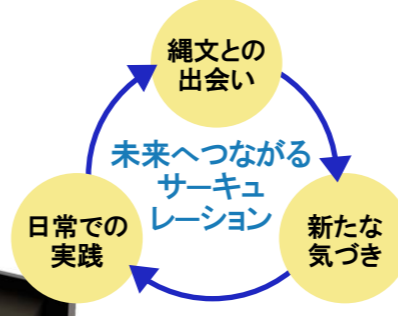
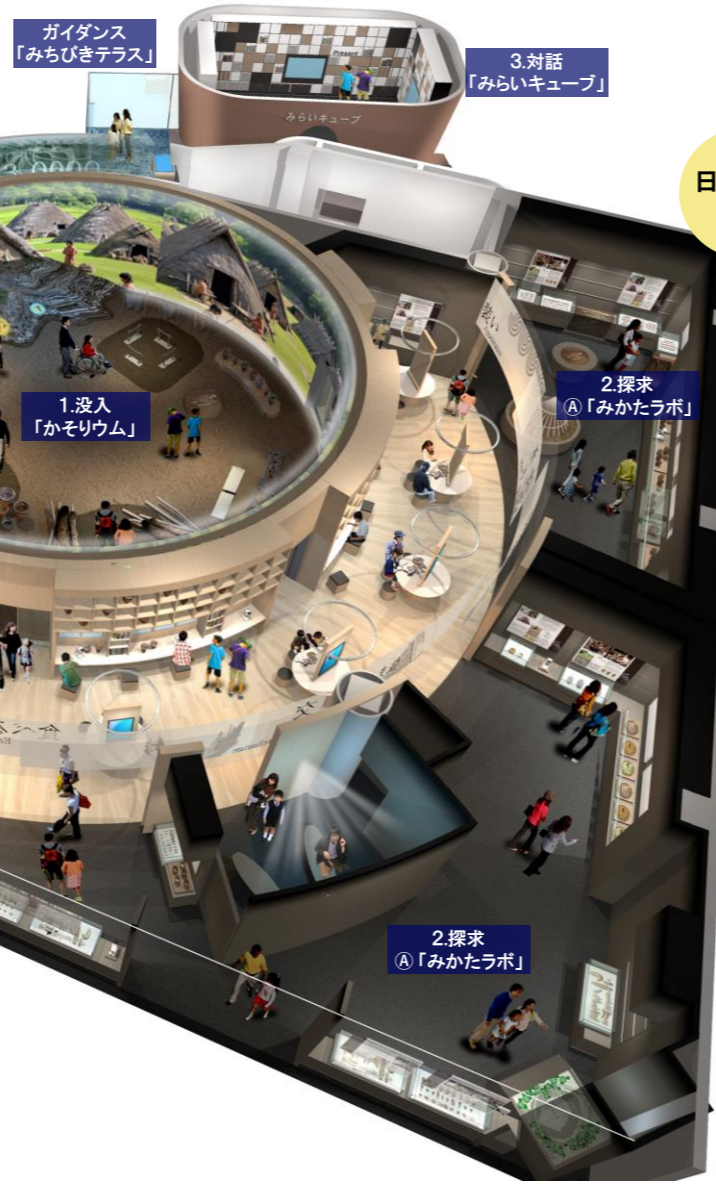
2. 探究

- ①「みかたらボ」
- ②「みえるラボ」

研究者の思考プロセスを辿り、貝塚を読み解く「みる視点」「循環型社会へのヒント」を獲得。

- ③「みつけるラボ」自分で思い描く

来館者自身が、「**みる視点**」と「**循環型社会へのヒント**」から、**展示資料を通して、貝塚の力に加え、自分なりの循環の視点に気づく。**



ガイダンス

「みちびきテラス」フィールドへの誘い
 実際のフィールドへの誘引。**史跡をより詳しく見るための情報や市内の情報等を発信し、ここを拠点に、貝塚や市内への回遊を促す。**

3. 対話

「みらいキューブ」創造的コミュニケーション
 「来館者同士や縄文ファン、AIじょーもん人との対話を通し、一人ひとりが持つ「縄文像」を可視化、貝塚での知恵を現代社会へ持ち帰るための始まりの場。



1. 没入型展示「かそりウム」



2. 探究型展示③「みつけるラボ」(編年ウォール)



3. 対話型展示「みらいキューブ」



史跡ガイダンス「みちびきテラス」

常設展示と連動した五感で感じる衣食住体験、土器づくり工房や史跡等を含む加曾利貝塚全体を体験するプログラムを用意

・体験プログラムでの「**ワクワクする学び**」体験。いつ来ても何かを体験できる多様な場所で多様な実体験を提供します（以下に示す体験はあくまでも一例）。



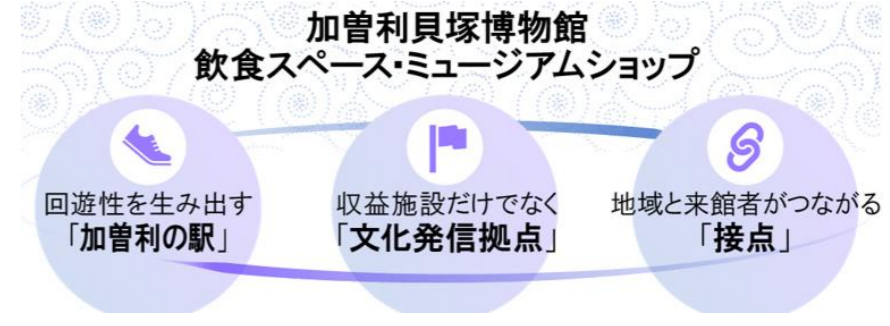
市内事業者を積極的に活用するとともに、地域の多様なボランティア団体などとも連携

- ・緊密な地域連携を図るため**地域事情に詳しい地域連携コーディネーター**を配置します。
- ・市内事業者の技術力向上の推進とともに、博物館運営に寄与する人材育成にも取り組みます。



加曾利式サーキュレーション(深める・拡げる・結びあう)の加速器

- ・来館者の滞在・回遊を促進し、施設全体の循環(サーキュレーション)を高める装置として機能します。
- ・「365日営業」とし、いつでも・誰でも利用できる施設とします。
- ・オリジナルのグッズやスイーツを販売し、縄文文化の発信と来館者の満足度向上の両立を図ります。



令和12年度に開館予定

・令和8年度から基本設計・実施設計を行い、令和10年度から建設工事に着手します。令和12年度に開館予定です。